



「かながわ人づくりコラボ2019」を振り返って

かながわ人づくり推進ネットワーク幹事会

幹事長総括

- 当日は「スポーツを通して個性を認め合う人づくり～学校現場の活動から～」を全体のテーマとして、オリンピックメダリストである山本博氏による講演をはじめ、県立保土ヶ谷養護学校及び県立秦野総合高校におけるスポーツを通じた人づくりの取組みに係る実践紹介とそれらに基づく教育論議を行うことができ、多様な視点を含むコラボになったと思います。
- 講演では、「オリンピックを目指して得られたもの～五輪メダリストからのメッセージ～」という演題のもと、山本氏の競技生活での実体験も交えながら含蓄のある多様な話をしていただきました。その長い競技生活の中で生み出された哲学ともいえるべき考え方は、多くの人が共感できるものであり、かながわの人づくりとも結びついてくる点もあったかと思えます。
- 今年は教育論議の一環として、県立保土ヶ谷養護学校及び県立秦野総合高校で実施しているスポーツを通じた地域や他の学校との交流の取組みについて、実践紹介がなされました。実践紹介の中では、障害の有無や年齢・年代の差異などを乗り越えて、児童・生徒が明るく楽しそうに交流を行っていることがうかがえました。また、交流を通して生徒にも様々な「気づき」や「成長」があったのではないかと感じました。こうした活動からも、「共生社会の実現に向けた環境づくり」が学校現場でも行われていることを多くの方にお伝えできたのではないかと考えています。
- そして、教育論議では、それぞれの実践紹介の内容も参考に、学識者や実践紹介の発表者、さらには高校生や大学生などの登壇者8名によってさまざまな視点から課題や解決方法などについて話し合うことができました。
- 実践紹介や教育論議での話し合いを通じて、本コラボのテーマについて、参加者それぞれの立場から、何が必要か、何ができるかについて考えるとともに、全ての人が多様なあり方を認め合い、尊重し、支え合い、参加できる共生社会の実現に向けた環境づくりのひとつとして、スポーツを活用した交流が有効な手段であることを参加者同士で納得することができたと思います。しかし、一般社会では未だ「共に生きる」の考えが十分浸透しているとは思えません。これを機に学校現場は勿論のこと、それぞれの立場からこうした活動を発信していくことを期待しています。
- 私たちネットワーク参加団体は、各団体の取組みを尊重しつつ、毎年開催している「かながわ人づくりコラボ」での教育論議を通して、教育ビジョンの「心ふれあう しなやかな 人づくり」をめざして、『思いやる力』『たくましく生きる力』『社会とかかわる力』の育成を、それぞれの立場と役割を自覚しながら取り組んでいきます。今後とも参加団体の皆様には、より一層のご尽力をいただきますよう、引き続きよろしく申し上げます。

※詳細な結果概要は、県教育委員会ホームページに掲載している「『かながわ人づくりコラボ2019』の実施結果の概要」をご覧ください。

【コラボ2019の開催概要】※敬称略

- 1 日時・場所 令和元年11月2日(土) 13:00～16:00 横浜市西公会堂 【参加者 306名】
- 2 テーマ スポーツを通して個性を認め合う人づくり ～学校現場の活動から～
- 3 プログラム
 - (1) 基調講演「オリンピックを目指して得られたもの～五輪メダリストからのメッセージ～」
(日本体育大学 教授 / 東京都体育協会 会長 山本 博)
 - (2) かながわ教育ビジョン一部改定について (神奈川県教育委員会 教育局長 田中 和久)
 - (3) 教育論議 [テーマ：県立学校におけるスポーツを通じた人づくりの取組み]

<教育論議に係る実践紹介>

内 容：県立学校におけるスポーツを通じた人づくりの取組み

紹介校：・県立保土ヶ谷養護学校（発表者：教頭 井上 浩子、教諭 相川 由宇）

・県立秦野総合高等学校（発表者：教諭 盛 健志）

<教育論議の登壇者>

◎コーディネーター

横浜国立大学 副学長 高木 まさき ※かながわ人づくり推進ネットワーク幹事

○パネリスト

横浜こども専門学校 校長、県立保土ヶ谷養護学校 教諭・生徒、県立秦野総合高等学校 教諭

県立光陵高等学校 生徒、日本外国語専門学校 学生（秦野総合高校卒業生）県教育委員会 委員

《教育論議での主な意見》

- ・ 共生社会の実現に向けて、スポーツをツールに交流するというのは比較的入りやすい取組みであると考えられる。特に、ボッチャは重度の障がい者にもできるスポーツであるとともに、初心者でも取り組みやすく、ライフスポーツとして継続できるメリットがある。
- ・ 共生社会の実現に向けて、保土ヶ谷養護学校で続けてきた4年間の取組みを終わらせず、オリンピック・パラリンピックの開催に関係なく、今後も更に推進していく必要性を感じている。今後は未就学児にもパラスポーツに参加することを広げていきたいと思う。
- ・ 授業交流では、あまり光陵高校の生徒とは話せなかった。今後、もっとスポーツ交流やイベントを増やすことができれば、生徒同士の会話や交流が弾むので、こうした取組みを増やすことができると良いと思う。
- ・ スポーツ交流を通して、生徒の主体性を育むことが重要ではないかと感じている。そのためにも、生徒にどこまで任せられるのか、教職員のサポートがどこまで必要なのか、教員としてその見極めが重要であると思っている。

今後の方向性

- 共生社会の実現に向け、社会を形成する個々人がお互いに知り合い・理解するために、学校におけるスポーツを通じた交流は非常に有効であると感じた。こうした交流授業で様々な会話をし、協力しながら何かを作り上げていく時間が良好な雰囲気や環境づくりにつながっていくと思う。
- 教育において、「気づき」ということは非常に大切なことである。子どもたちが、スポーツを通じた他者との交流の中で、いろいろなことに主体的に気づき、他者から認められる中で、自己肯定感を育みながら「社会とかかわる力」や「思いやる力」を身に付けてほしい。
- 子どもたちが社会に参加するきっかけとして、スポーツを通じた交流を活用できるとよい。学校の中だけではなく、地域や学校とのつながりを「築き」ながら、また違いというものを「気づき」ながら、それをお互いに尊重し合い、交流をすすめていくことが、神奈川県が進めている共生社会づくりにもつながっていくのではないかと思う。